よりよい自己の生き方を見いだす子供を育てる道徳科学習指導
～道徳的価値の理解を深める・生かす対話活動を通して～

研修教諭　小柳　一也
指導教諭　松隈　晶平

１　主題設定の理由

(1) 教育の動向から

「第４期教育振興基本計画」では、総括的な基本方針として「持続可能な社会の創り手の育成」及び「日本社会に根差したウェルビーイングの向上」が示された。特に「ウェルビーイング」は、自他の内面的な幸福であるため、人間としてよりよく生きようとする内面的資質である道徳性を養う道徳科と深く関連していると考える。ウェルビーイングとは、自他ともに身体的・精神的・社会的に良い状態であることのことであり、それらが持続的に良い状態であることを含む包括的な概念である。

道徳科の目標に示されている「よりよく生きる」とは、自立した人間として他者と共存する生き方を実現することであり、よりよく生きることが、ウェルビーイングの概念における「個人、地域、社会の幸せや豊かさ」につながっていくと考える。他者と共によりよく生きるための道徳性を養うためには、道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考えることが必要である。そのことで、既有の感じ方、考え方が、自分と共に他者や社会を大切にする感じ方、考え方に高まり、よりよい行い方を実現することができると考える。

以上のことから本研究では、自分にとっても、他者や社会にとってもよりよい自己の生き方を見いだすことが、予測困難な時代の中でも、自立した人間として他者と共存し、互いの幸福を実現することができるといった上でも意義深いと考え、本主題を設定した。

(2) 児童の実態から

本校２、３、４、５年生を対象に、道徳科の学習における実態調査を行った（資料１）。自分自身、他者を大切にしているかという問いに対し、いつもできると答えた児童は 40％未満である。また、自分、他者双方を大切にすることがいつもできると答えた児童が 15％である。また、価値理解が自己の行い方へのつながっているかという問いに対し、いつもできると答えた児童が 40％未満である。これらの課題を解決し、自己のよりよい生き方を見いだすためには、自他を大切にする感じ方、考え方を高める必要がある。物事を多面的・多角的に考える対話活動を通して、道徳的価値の理解を深め、自他の感じ方、考え方をふまえた自己のよりよい生き方を見いだす子供を育てる本研究は、意義深いと考える。

	いつもできる（いつもある）	だいたいできる（だいたいある）	できる（ある）	あまりできない（あまりない）	できない（ない）
自分自身を大切にできているか。	32%	25%	19%	13%	11%
他者を大切にできているか。	39%	29%	21%	4%	7%
自分自身と他者どちらも大切にできているか。	15%	31%	27%	19%	8%
道徳的価値の理解が毎時間できているか。	34%	32%	16%	17%	1%
道徳的価値の理解が行い方につながっているか。	25%	42%	24%	7%	2%

資料１　道徳科に関する実態調査結果（N＝139）

(3) これまでの指導の反省から

これまでの道徳科学習指導において、道徳的な問題について多様な視点を基に道徳的価値を捉えたり、学んだことを振り返り、自己のこれからの生き方に生かそうとしたりする姿を見ることができなかった。これは、次のような指導の課題があるためであると考える。

●道徳科の学習過程において、多面的・多角的な視点から考えさせるための手立てが不十分だった。
●道徳諸価値の知的・観念的な理解に偏り、自己の生き方とつなげるための手立てが不十分だった。

以上の課題を踏まえ、感じ方、考え方を深める・生かす対話活動を通して、道徳的価値について自分との関わりの中で理解を深め、多様な感じ方や考え方にふれる中で身近な集団の中で自分のよさや課題を自覚し、自己のよりよい生き方を見いだす子供を育てる上で意義深い。

２　主題の意味

(1)「自己の生き方」とは

自分自身の感じ方、考え方を基にした自分自身の行い方のことである。

感じ方、考え方は、子供がこれまで育ってきた環境の中で形成されていき、それを基にして、行い方として表出する（図１）。他者と共に生きるためには、自分自身を大切にする感じ方、考え方と、他者を大切にする感じ方、考え方が必要であり、双方の感じ方、考え方は各個人が元々もっているものであると考える。

道徳科では、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考える中で、道徳的価値についての自己の感じ方、考え方を想起しながら、自己の生き方についての考えを深めることが必要である。そのことが、主体的な判断の下に行動し、自立した人間として他者と共によりよく生きるための基盤となる道徳性を養うことにつながる。

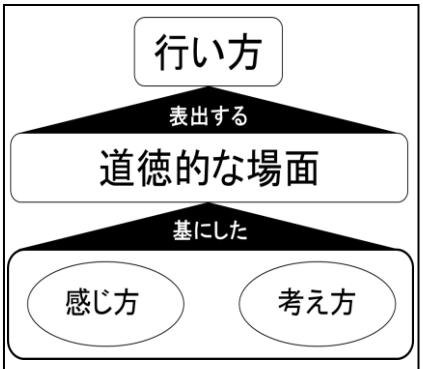


図１　生き方

(2)「よりよい自己の生き方」とは

道徳的価値についての自分自身を大切にする感じ方、考え方と他者を大切にする感じ方、考え方を調和のとれたものにし、それを基にした道徳的に価値高い行い方のことである。

道徳的価値とは、よりよく生きるために必要とされるものであり、人間としての在り方や生き方の礎となるものである。これは、いつの時代も変わらない普遍のものである。自分自身を大切にする感じ方、考え方だけに偏ると、独りよがりな生き方となり、異なる感じ方、考え方をもった他者と一緒に過ごすことが困難になる。つまり、自分自身だけでなく、他者を大切にする感じ方、考え方を基にすることで、よりよい自己の生き方につながる。よりよい自己の生き方を実現することで、予測困難な時代の中でも、自立した人間として他者と共存しながら生きることにつながると考える。二つの側面は、以下のように高まっていく。

自分自身を大切にする感じ方、考え方
→他者からの働きかけのみに従うのではなく、**自分の思いや願いにもよりそった感じ方、考え方**へと高まる。
他者や社会を大切にする感じ方、考え方
→自分の事のみを考えるのではなく、**他者の事まで気を配る感じ方、考え方**へと高まる。

他者からの働きかけに従うとは、他者の言動によって自分の行動や意思を決定することである。自分の思いや願いによりそうとは、自らが定めた規範によって、正しく生きようとすることである。自分自身を大切にする感じ方、考え方を高めることで、自分自身を偽ることなく、自分自身のよさをのばすことができる。自分の事のみを考えるとは、他者を顧みず、自分を中心とした考え方のみを大切にしようとすることである。他者のことまで気を配るとは、自分自身のことだけではなく、他者のことまで大切にしようとすることである。他者や社会を大切にする感じ方、考え方を高めることで、他者と共存しながら生きることができる。以上のことから、双方の調和をとる必要があると考える。

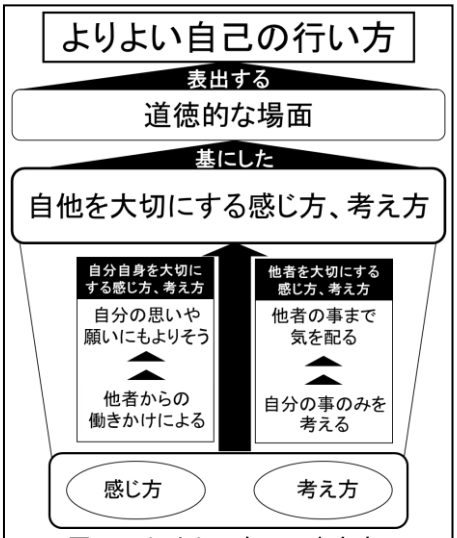


図２　よりよい自己の生き方

調和とは、自分自身を大切にする感じ方、考え方と、他者を大切にする感じ方、考え方の双方が、バランスのとれた状態で高まることである。双方の感じ方、考え方を高めることで、自分にとっても、他者にとってもよりよい行い方へとつながり、よりよい自己の生き方を実現することができると考える。本研究では、上記のような感じ方、考え方を基に決定された、道徳的に価値高い行い方を、よりよい自己の生き方と定義する（図２）。

(3)「よりよい自己の生き方を見いだす」とは

道徳的価値についての自己の感じ方、考え方を、自分自身とともに他者や社会を大切にする感じ方、考え方を基に、自己のよさや課題について知り、道徳的価値についての自己の感じ方、考え方をみつめなおし、自己の行い方につなげることで、よりよい自己の行い方にすることである。

自己のよさや課題を知ることで、感じ方、考え方をみつめなおすことができ、自己の行い方につなげることができると考える。具体的には、以下の段階でよりよい自己の生き方を見いだす（図３）。

ア 自己の生き方を知る

自己の生き方についてのよさや課題を確かめることである。道徳的価値についての既有の感じ方、考え方やこれまでの自己の生き方を振り返る。そのことで、自己の生き方のよさや課題を把握し、道徳的価値についての自己の感じ方、考え方をみつめなおすことにつなげることができると考える。

イ 感じ方、考え方をみつめなおす

道徳的価値についての既有の感じ方、考え方を、自分自身とともに他者を大切にする感じ方、考え方にすることである。道徳的価値に関する多様な他者の感じ方、考え方から、自他を大切にする感じ方、考え方を明らかにする。そして、自他を大切にする感じ方、考え方の視点から、自己の考えをみつめなおす。そのことで、道徳的価値についての感じ方、考え方を高め、よりよい行い方を決定することにつなげることができると考える。

ウ 自己の行い方につなげる

自分自身とともに他者を大切にする感じ方、考え方を、これからの自己の行い方とむすびつけることである。自分自身と他者を大切にする道徳的価値についての感じ方、考え方を基に、これまでの自己の生き方について振り返る。そのことで、これまでの自己の生き方のよさや課題から、これからのよりよい自己の行い方を表出することにつなげることができると考える。

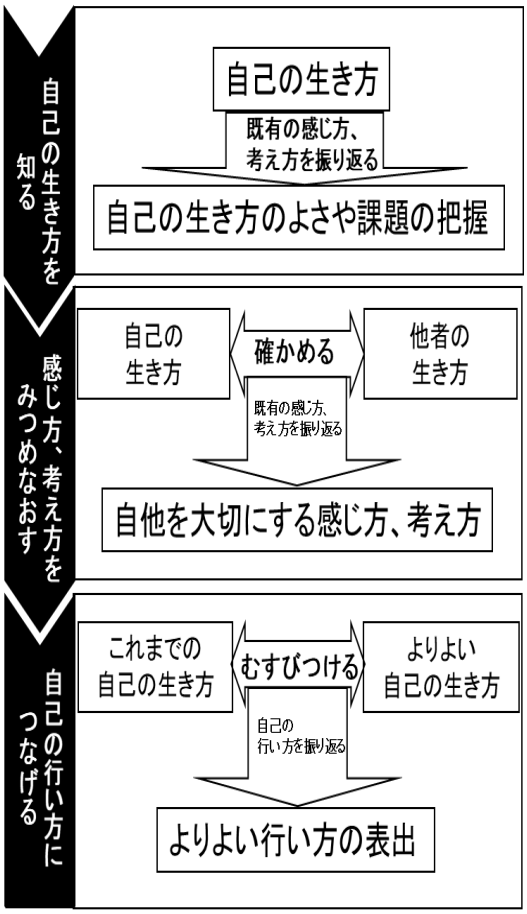


図３　よりよい自己の生き方を見いだす

(4)「よりよい自己の生き方を見いだす子供」とは

具体的に目指す子供の姿は以下のような資質・能力を身につけた子供のことである。

表１　目指す子供の資質・能力

道徳的価値の理解	自己の既有の感じ方、考え方を基に問題意識をもち、よりよい自己の生き方の実現のために、自己の道徳的価値について理解（価値理解・人間理解・他者理解）を深める。
多面的・多角的な思考	道徳的価値についての自他の感じ方、考え方を多様な視点から比較することと通して、自分自身とともに他者を大切にする道徳的価値に関する感じ方、考え方に高める。
よりよく生きるための道徳性	道徳的価値についての感じ方、考え方を基に、自立した人間として他者と共によりよく生きるための基盤となる道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を養う。

なお、これらの資質・能力は、道徳科の一単位時間の学習全体を通じて高まっていくものであり、学習における部分的な姿のみを評価していくものではないと考える。

３　副主題の意味

(2)「道徳的価値の理解を深める対話」とは

教材の中心場面における登場人物の心情についての自他の考えを時間軸、空間軸の観点で比較する話合いのことである。

時間軸とは、過去、現在、未来といったこと時間経過のつながりを考慮した視点のことである。時間軸の観点から、中心場面における自他の考えを比較することで、現在の状況を分析的に考えたり、中心場面における自分の考えが長期的にどのような影響があるか考えたりすることができる。空間軸とは、自分、他者、集団といった対象の広がりを考慮した視点のことである。空間軸の観点から中心場面における自他の考えを比較することで、自分の考えが自分だけではなく周囲の人々にどのような影響を及ぼすかを考えることにつながり、自他ともに大切にされる感じ方、考え方に見直すことができる。この二つの観点から考えることで、多面的・多角的な視点から道徳的価値の理解を図ることにつながり、自己の考えの不十分さを実感し、考えを見直すことで本時の道徳的価値についての理解を深めることができると考える（図４）。

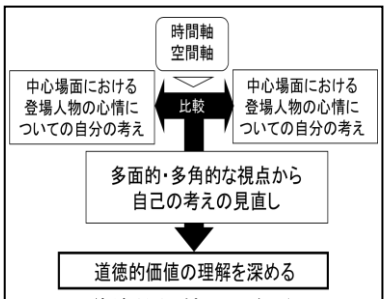


図４　道徳的価値の理解を深める

(3)「道徳的価値の理解を生かす」とは

深めた道徳的価値の理解を基に、道徳的な場面についての自他の考えを、共通点、差異点の観点で比較する話合いのことである。

教材を通しての価値理解だけでは、子供たちにとって特定の条件、場面に限定したものにとどまりやすい。そこで、本時の学習における道徳的価値の理解を、道徳的な場面にどのように活用できるか考える。道徳的な場面とは、本時の道徳的価値と関連する日常的な出来事のことである。道徳的価値についての新たな考えを基に、道徳的な場面について考えることで、教材の価値理解に留まらずに自分の日常生活まで考えが広がり、道徳的価値の理解を日常生活に一般化することにつながると考える（図５）。

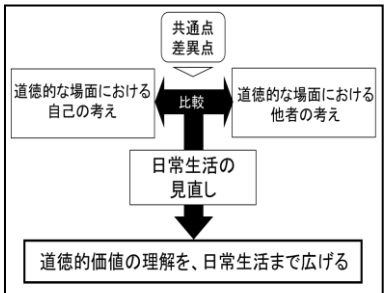


図５　道徳的価値の理解を生かす

(4)「道徳的価値の理解を深める・生かす対話活動」とは

自分自身とともに他者や社会を大切にする感じ方、考え方にすることができるように、時間軸、空間軸の観点から自己の感じ方、考え方を見直す「深める対話活動」、自己の感じ方、考え方を日常生活における道徳的な場面に活用する「生かす対話活動」のことである。

本研究では、展開前段において道徳的価値の理解を深める「深める対話活動」、展開後段において深まった道徳的価値についての自分の考えを、日常生活における道徳的な場面に活用する「生かす対話活動」を位置付け、それぞれ対話活動を行う（図６）。

導入段階では、まず道徳的価値についての既有の考えを振り返る。次に、自他の考えを共通点、差異点から比較し、自己の考えを広げる。そして、日常生活における行為のずれや、自他の考えのずれから主題に対する問いをもつ。

展開段階では道徳的価値についての自己の感じ方、考え方を、自分自身とともに他者や社会を大切にする感じ方、考え方にするために、「深める対話活動」「生かす対話活動」を行う。「深める対話活動」では、教材を基に道徳的価値の理解を深めることをねらいとする。まず、教材の中心場面における登場人物の心情についての自分の考えをつくる。次に、自他の考えを時間軸、空間軸の観点を基に比較する対話活動を行う。そして、全体交流で多様な考えを収束する。そのことで、本時学習における道徳的価値の理解を深めることができる。「生かす対話活動」では、深めた道徳的価値の理解を、道徳的な場面に広げることをねらいとする。まず、道徳的な場面について、自分の考えをつくる。次に、自他の考えを共通点、差異点の観点を基に他者と比較する対話活動を行い、自己の考えを広げる。そして、本時の道

徳的価値についての自分の考えを、道徳的な場面とむすびつけることができるよう、自分の考えをつくりかえる。そのことで、深めた道徳的価値の理解を、日常生活につなげることができると考える。

終末段階では、よりよい自己の生き方について考えを深めるために、本時学習を振り返る。そのことで、これまでの自己の感じ方、考え方と新たな感じ方、考え方の変容を実感し、よりよい自己の生き方を見いだすことにつながる。一貫して自分との関わりで考えることにつながり、自己を見つめ、感じ方、考え方を深められるようになると考える（図６）。

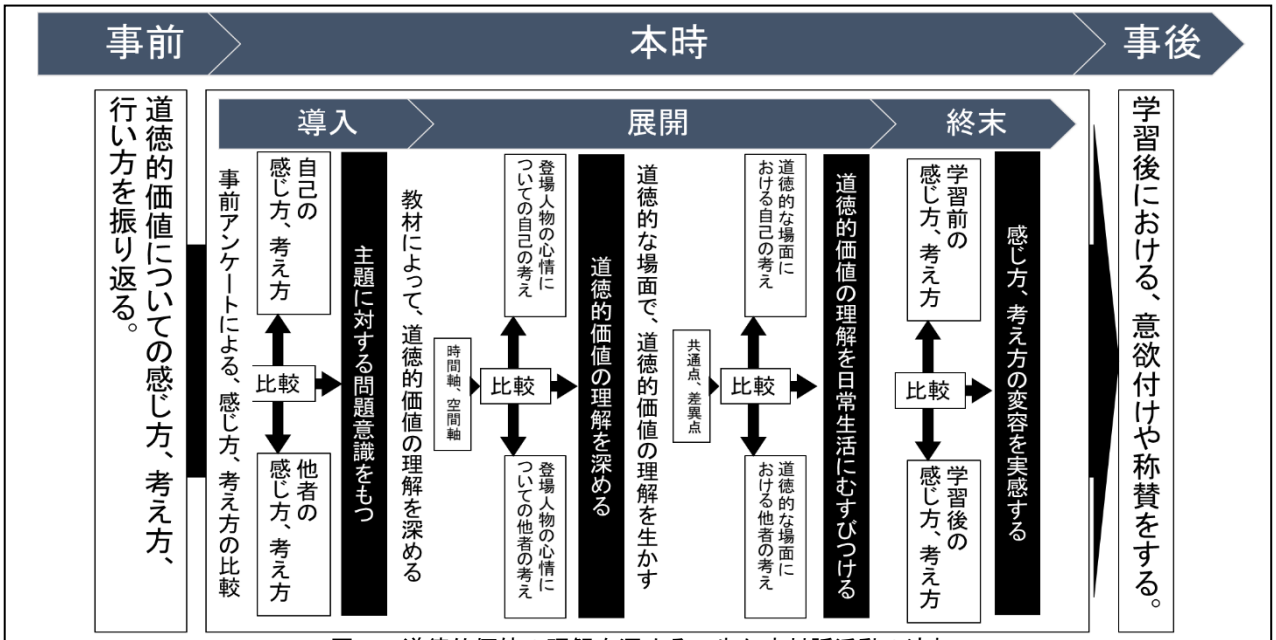


図６　道徳的価値の理解を深める・生かす対話活動の流れ

(3)「自他との関わりで深める・生かす対話活動」の構成とは

道徳的価値を追求する対話活動には、次の目的、内容、方法があり、一単位時間の学習過程において、表２のように位置付ける。

表２　「道徳的価値を深める・生かす対話活動」の目的，内容，方法

	深める対話活動	生かす対話活動
目的	教材を通して、道徳的価値の理解を深めるため。	深めた道徳的価値の理解を、道徳的な場面に広げるため。
内容	自己の考えの時間軸、空間軸の観点からの見直し。	自己の考えの共通点、差異点からのつくりかえ。
方法	①教材の中心場面における登場人物の心情を考え、自己の考えを表出する。（個人） ②自他の考えを時間軸、空間軸の観点から比較する。（ペア、グループ） ③全体交流し、共通点、差異点の観点から本時の学習の道徳的価値を明らかにする。(全体)	①道徳的な場面について、自分の考えを表出する。（個人） ②自他の考えを共通点、差異点の観点から比較する。（ペア、グループ、全体） ③自分の考えをつくりかえ、道徳的価値の理解と道徳的な場面をむすびつける。（個人）

４　研究の目標

道徳科の学習において、よりよい自己の生き方を見いだす子供を育てる方途として、道徳的価値の理解を深める・生かす対話活動の在り方とその有効性を究明する。

５　研究の仮説

以下の視点から、道徳的価値の理解を深める・生かす対話活動を機能させれば、自己の感じ方、考え方から問題意識につなぐとともに，多面的・多角的な理解を基に道徳的価値を深め、これまでの自己の生き方を振り返り、よりよい生き方を実現するための思いや願いをもつ学習過程が成り立ち、よりよい自己の生き方を見いだす子供が育つであろう。

【視点１】教材化の視点の具体化
【視点２】道徳的な場面の設定の工夫
【視点３】効果的・効率的な ICT 機器活用の工夫

６　研究の構想

(1) 教材化の視点の具体化

ア　教材開発・教材分析

よりよい自己の生き方を見いだす子供を育てるためには、教材の登場人物の心情や感じ方、考え方を基に、道徳的価値や自己理解を深めることができることや、多面的・多角的に考えることを通じて道徳的価値を理解できるようにすること、対話活動を活性化できるようにすることを大切にしながら道徳的価値に対する自己の感じ方、考え方を個人的側面と社会的側面をふまえたものにすることを目指す。そこで、以下の三つの視点に基づいて学習材開発・教材分析を行う。

○本質性・・・	道徳的価値が含まれた読み物教材であり、主人公の行為を基に推し量るための感じ方、考え方が明確に示されていないことで、自分の感じ方や考え方とのずれが生まれ、道徳的価値を自分との関わりで捉えることができる。
○多様性・・・	自他の感じ方や考え方にずれが生まれやすく、他者と考えを交流したり、視点を変えながら考えたりすることで、道徳的価値の理解を深める必然性がある。
○活動性・・・	教材における問題場面や状況を設定することで、自他の感じ方、考え方を比較したり、意欲的に考えたりして対話を活性化させることができる。

イ　教材の構造的な分析

教材の主題と内容を整理し、本時の学習で捉えるべき内容を明確にするために、以下の視点から教材を構造的に分析する。

人間的な弱さ・脆さ	中心価値に反する主人公の言動(場面)が描かれているのはどこか。
回転軸	主人公が変革するきっかけや葛藤場面はどこか。
価値覚醒	主人公が自分の生き方として、どんな決断、選択をしたのか、なぜその生き方を選んだのかが描かれているのはどこか。
価値納得	主人公が決断し、選択した生き方に納得した姿が描かれているのはどこか。

例えば、「A　正直、誠実」第五学年「のりづけされた詩」では、特に四、五、六年生で扱う教材について、捉えさせるべき価値の系統を明らかにする。次に、「人間的な弱さ・脆さ」「回転軸」「価値覚醒」「価値納得」の視点から教材を分析し中心場面を明確にする（図７）。そして、「誠実の理解」や「明るい心で生活できる喜び」といったこの教材で捉えさせたい内容を明確にし、本時のねらいを設定する。

あらすじ	主人公の和枝は、学級文集に掲載する詩を考えるが、出だしの二、三行が思い浮かばない。何気なく手に取った「五年生の文集」の中に、自分のイメージする作品の出だしと題名を見つけ、自分の作品に使ってしまう。良心の呵責に苛まれる和枝は、先生に不正を告白し、新たに作った自分の詩を、学級文集にのりづけする話である。
状況	○和枝は、学級文集に掲載する詩を書き始めるが、出だしの一、二行がうまく表現できずにいる。書き上がった光子さんの明るくはずんだ声を聞き、落ち着かず不安になる。 →すぐには書く気持ちになれず、「五年生の詩集」という本を読み始めた。

人間的な弱さ・脆さ	回転軸	価値覚醒：中心場面	価値納得
○和枝が書こうとしている内容にぴったりの詩を見つける。 →出だしの一、二行も、題名も気に入る。 →自分の詩に使ってしまう。	**○「いい詩ね。」という明子の言葉に、むねがしめつけられる思いだった。** →詩のことが気になる。 →打ち明けられず、印刷が終わってしまう。	**○先生に本当のことを打ち明ける決心をする。** →先生は、一言も言わずに話を聞く。 →和枝はゆれ動く心の中で思いついたあることをはじめる。	**○つくえのうえの文集には、「地平線」という詩はなかった。** →和枝のページには別の詩が、一枚一枚のりづけされていた。

図７　第五学年「のりづけされた詩」の四つの視点を基にした教材分析の例

ウ　活用類型を基にした授業づくり

授業づくりにおける教材の活用について、「共感的活用」「批判的活用」「範例的活用」「感動的活用」の四つの活用類型から、どの活用類型で授業を行うか検討する。例えば、第五学年「のりづけされた詩」では、不正をすることはいけないことだとわかっているが、ついやってしまった和枝の心情に共感させ、誠実に生活することの意義やよさについて考えを深めたいと考え、共感的活用を基に以下のような授業づくりを行った。

同質性の追求	異質性の追求	異質性の同質化
主人公(取り上げる人物)がもっている弱さを追求する。 【発問例】 「主人公はこの時、(ねらいに反する場面)、どんな気持ちや考えだったのだろう。」	主人公(取り上げる人物)の価値ある行為や気付きのもとにある感じ方、考え方を追求する。 【発問例】 「主人公はこの時(ねらいに迫る場面)、どう考えて行動したのだろう。」	主人公(取り上げる人物)の価値ある(価値に反する)行為後の快(不快)感情を追求する。 【発問例】 「このとき、主人公はどのような気持ちだったのだろう。」

展開段階では、和枝の後悔や自責の念に気付くことができるように、「明子の言葉を聞いて、和枝はどんな気持ちでしたか」と発問し、和枝が詩を写してしまった時の気持ちを共感的に考え、人間的な弱さを追求した。次に、先生に伝えると決心した和枝の思いに気づくことができるように、「和枝はどんな思いで先生に打ち明けたのでしょう」と発問し、和枝が不正を告白し、行動を改めようとした気持ちを考え、「誠実」の価値に迫る強さを追求した。そして、自分自身に誠実に生活できることのよさについて考えることができように、「正直に打ち明けると、不正をしたことがばれてしまうのに、なぜ正直に不正のことを伝えたのでしょう」と発問し、詩をのりづけした後の和枝のついて考え、行為後の快感情を追求した。

(2) 道徳的な場面の設定の工夫

他の考えと結び付けたり、立場を変えたり、過去と比較したり、条件や状況を変えたりする場面を設定することで、子供の思考を一層深め、日常生活につなげることができると考える。そこで本研究では、以下の３つの視点から道徳的な場面を設定する。

類 似 性	子供の生活場面と類似した場面であり、自分の考えの根拠をもちやすく、自他との関わりで考えることができる。
連続・発展性	自己のこれまでの経験と比較したり、本時の道徳的価値の理解とつなげて考えたりして、これからのよりよい自己の生き方について考えることができる。
活 動 性	道徳的な場面を設定することで、自他の感じ方、考え方を比較したり、意欲的に考えたりして対話を活性化させることができる。

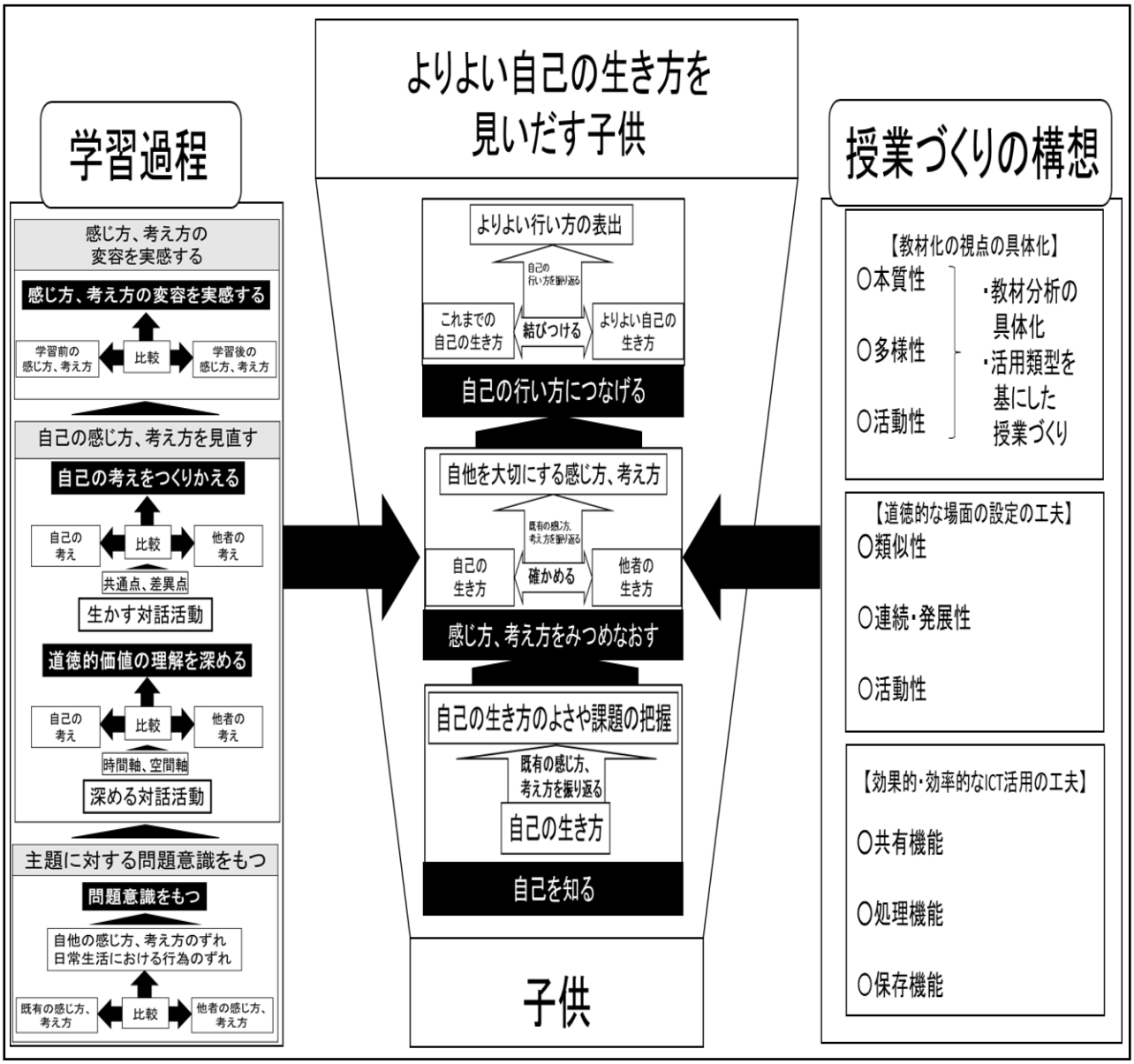
(3) 効果的・効率的な ICT 機器活用の工夫

本研究では，ICT 機器を機能に応じて以下のように活用し，体験的な表現活動を位置付けた対話が活性化するようにする。

表３　効果的・効率的な ICT 機器活用の工夫

機能	共有機能	処理機能	保存機能
目的	感じ方や考え方の多様さへの気付きを促進するため	自他の感じ方、考え方の共通点や差異点についての気付きを促進するため	振り返りにおける、本時の道徳的価値に対する気付きを強化するため
具体的内容	○自他の考えの提示 ・モニターへの拡大提示 ・タブレット間での共有 ○アンケート結果、活動の様子、映像資料の提示 ・モニターへの拡大提示	○感じ方や考え方の分類、整理 ・比較、分類、関連付け	○日常生活の様子の蓄積 ・道徳的価値に関する日常生活の様子を撮影した写真、動画の蓄積 ○振り返りの蓄積 ・端末上に保存

7　研究構想図



8　検証計画

検証過程	検証の視点	検証方法
深める対話活動	展開段階において、教科書の場面について想起した経験や体験を基に道徳的価値に関わる自他の感じ方、考え方について、時間軸、空間軸の観点から比較させ自分の考えを見直す「深める対話活動」を位置づけることは、道徳的価値の理解を深める上で効果的であったか。	対話活動時の子供の発言 ノートの記述
生かす対話活動	展開段階において、日常生活における道徳的な問題について自己の考えをつくり、自他の感じ方、考え方を共通点、差異点から比較し、自分の考えをつくりかえる「生かす対話活動」を位置づけることは、道徳的価値と日常生活をつなぎ、自己の感じ方、考え方を深める上で有効であったか。	対話活動時の子供の発言 ノートの記述